

# 九尾の魂

神羅万象フロンティアFan Book



成人向



「全でが遅かった。人間がそう怖った時には、手間あかかせやがって」

「へっ……私がか我らが、ミーア君を助けた」  
「油断大敵、であつたか……」

「楽しい勝者の特権タイムといかせてもらええ」  
「ラビ、ブヒヒ！ そんなじゃあ今から、楽しい」  
「白面九尾と白面九尾……戦場を縦横無尽に駆け回り、ついに敵重要拠点へ響がる道をたつた二人で突破したその胸中に慢心が無いわけではなかったが、それでもクオンも、イツナも、百戦錬磨の猛者として最低限の注意と用心は怠つていないつもりだった」  
「その上で、敗けた」  
「ラビド如き下級モンスターがどれだけ群れたところ、正面から戦えば自分達には敵しえない……それが、過ぎたのだ」  
「ラッラッラ！ これだけの数から俺らの特性オイルを二度にブツかけられちや、いくらおめしらがすばしっこくてもまともに身動きなんざとれるもんじゃねえよなあ」  
「その通りだつた、動こうとするそばから次々とオイルをかけられ、攻めるも退くもままならず、結果として無敵不敗を誇つたはずの白面九尾のコンビは、ラビドの群れの前に呆気ない敗北を喫じたのだ」

「この……『種火』」

これから始まるであろう後等に誘導しながら、イツナは卑賤な笑みを隠そうともしないブリード達に再突き、歯噛みした。

「ラフ、下種で結構！……その、タツフリと全身に擦り込んでやるからな、ブリード！」

「ゴク、ゴク……ゴク、ゴク……」

「こんなものを擦り込んで、いつたいなんものつもりだ？」

「あらゆる毒物に精通しているクオンには、ラリドのオイルに含まれている成分が何であるかという知識も無論あった。」

「聞かなくてもわかってるだろうに……ブヒヒヒ……」

「まったく、可愛いねえ。」

「ブヒヒヒ……」

「クオンの口から、鼻にかかった汗だるい呻きが漏れた。」

「……でも一人ともバカでけえ乳してやがるなあ。本当は狐なんかじゃなくても、生鬼の雌だつたりするんじゃないのか？」

「ブヒヒヒヤヒヤヒヤ……」

「……」

「愚弄に反するイツナの舌にも、白面九尾のものなどではなく、女の……雌の舌だ。」

「ラリドのオイルには、全身の感覚を鋭敏にすると同時に意識状態を低下させて対象を酩酊させるといふ……」

「相反する効果がある。」

「薬効としては微弱ながら、耐性を身に付けづらいという特徴を持ち、イツナもクオンも朦朧としていく意識の中、全身をまさぐられる感覚だけが肥大化していくのを止める事が出来ずにいた。」







どうだア？  
この特製オイルの  
味はヨオ

フエエエツ



もうすっかり  
身体の芯まで  
擦り込まれて

脳ミソまで  
トロリトロリにとろけ  
てんじゃねエかマ?

私もかつては絶影と  
呼ばれた者……  
この程度の……  
コト……で……ン







ダメだ……  
ただでさえ感じ  
すぎてしまう  
というのに……

これ以上……  
されたらあッ



これ以上？  
これ以上  
ナンだっつてんだよオ

ナンとか言っつて  
みろよオツ  
ブヒヒヒッ



タマンねエ  
乳肉だぜエ

ココなんて……  
ブヒッ  
弱いんじやねエの？



ブッヒッヒ  
まさか図星かア？  
乳首がコリコリだぜ

やめろッ やめろおッ  
胸の間に熱くて臭い  
ゴリゴリラードチンポ  
挟まれて……  
乳首までされたら……あッ







もう……  
身体の疼きが  
抑えられない……ッ











ムムム

はっ  
はっ

どうしてもって  
お願いするんなら  
トクベツだ

コイツどうどう  
自分でマンコ弄り  
始めちまったかア

チンポ突っ込んで  
やらねエことも  
ねエがな



IDN.....  
F12Nを2P  
ヨホを555.....

ごきるわけ  
ないのおお♥

お願いしまあミ  
クオンのおまんこ  
ラード様のチンポ突っ込んでん  
滅茶苦茶いっしょにだわいっしょ♥

おっ  
おっ

おっ













穴という穴が  
チンポで塞がれて……ッ  
こんな臭い獣チンポに  
囲まれてるのに……

プヒヒッ  
まるで全身  
マンコだぜエ

ぶっぶっ

おまんこ

タマンねエなア

おまんこもお尻も  
おっぱいも  
もう……堪らないのお  
……



おまんこ

プヒヒッ  
もう……タマらんッ  
搾り出されるッ

おまんこ

おっぱい













































寒天示現流

◆黑色禁星帝国